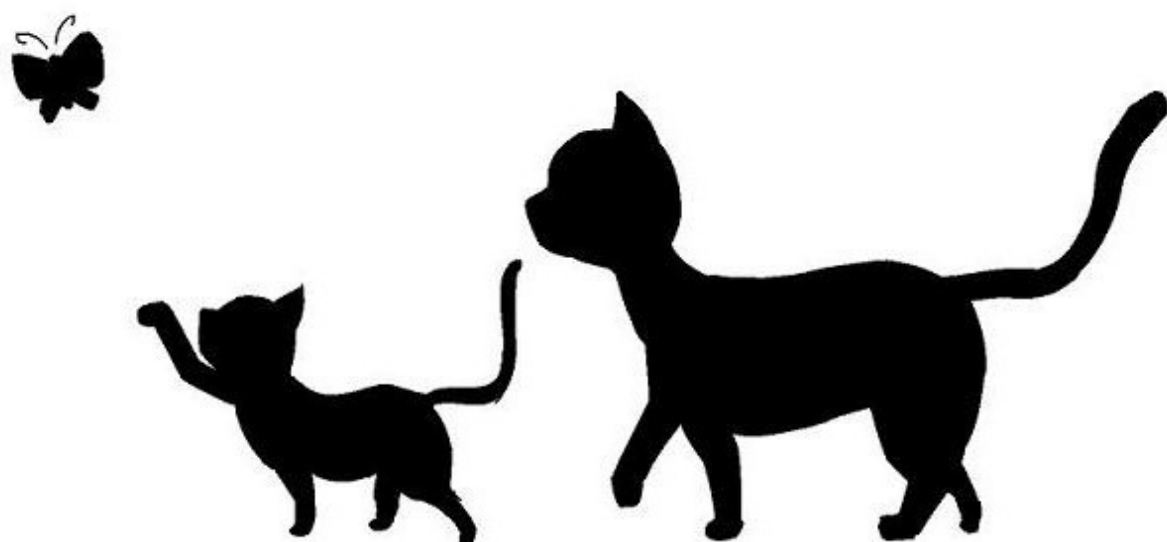


# こねこのお願い



さくら ゆき

目を覚ますと、なにか違和感を覚えた。なんとなく体がむずがゆいような、何か違うような気がする。

ぼんやりと天井を見ていると、随分いつもより高く感じた。

あれ？ なんだかおかしいぞ？

僕は呟いたつもりだった。

「うにゃあん」

猫の声が聞こえた。びっくりして起き上がろうとして、もっとびっくりした。

「うわあっ」

なんだ？ これは一体どういうこと？

叫んだつもりの僕の言葉は、ぎにゃーとしか聞こえなかった。僕がいつも寝ていたベッドは何倍も大きくて、窓も何倍も大きくて、部屋も何倍も広い。巨人の国に迷い込んだみたいだ。だけど、そんなことよりも。

僕の手は小さくて毛むくじゃらで、ピンク色の肉球がくっついていて。そっと、勢いをつけてベッドから飛び降りて、壁際にある姿見に恐る恐る体を映してみたら、やっぱりそうだった。

起きてみたら、僕は猫になってしまっていたのだ。

コンコン。ノックの音が聞こえる。

「ひろゆき。起きてる？」

起きてるけど、大変なんだってばお母さん。

言ってみたけれど、やっぱりにゃーとしか言えない。僕の声にびっくりしてドアを開けたお母さんは、僕の顔を見てきゃーと叫んだ。

「一体どこから入り込んだの！ しっしっ！」

お母さんは暴れる僕を掴んで、窓を開けた。ベランダにぽいっと出して、鍵を閉めてしまう。

待ってよお母さん。僕だよ、僕がひろゆきだってば！

お母さんに僕の言葉は聞こえない。でも仕方ない。僕自身にだって、僕の言葉には聞こえないんだから。

だけどお母さん、ここは二階だよ？ どうやって降りたらいいのさ。

本物の猫だったら、きっと簡単に降りられるのだろう。よくベランダや屋根の上で、野良猫が日向ぼっこをしているのは見かけるから。けど、僕は猫じゃない。確かに見た目は猫だとしても、猫になりたてほやほやだ。自分の体をどう使えばいいかもわからないのに、一体どうしたら。

僕はベランダに枝を伸ばしている庭木に飛びついた。体はとても軽くて、うまく飛び移れた。野良猫がそうやって屋根に上り下りしているのを見たことがある。僕は木の幹に爪をたてながら、殆ど滑り落ちるようにして、なんとか地面に辿り着いた。

着いたのはいいけれど。

(これからどうしよう...)

僕は取り敢えず、庭の生け垣の下に潜り込んだ。四本足で歩くのは、思ったよりも簡単に出来たので、猫らしく手足を追って地面の上に伏せてみた。日影の湿った土の匂いがぷーんと香る。

居間のある縁側の方を見ながら、僕は考えた。どうやったら元に戻れるんだろう。人間の言葉を話せない限り、お母さんが僕の話の聞いてくれるとは思えない。それに、お母さんに僕だと分かってもらったところで、お母さんだって僕をどうやったら人間に戻せるかなんてわからないだろうと思う。

(どうしよう...)

学校はどうしたらいいんだろう。お母さんは僕がいなくなって心配しているかな。でも、家の中には入れない。このままここにいるのをお母さんに見つかったら、さっき入り込んだ猫がまだいると思われて、怒られるかもしれない。

兎に角、落ち着けるところに行ってみよう。猫がいても追い出されないような、ひとりで座ってよく考えられるような場所。そうだ。僕が毎朝学校へ行くときに通る道に、空き地がある。そこには野良猫が何匹もいて、あったかい朝は日向ぼっこをして、寒い朝は丸くなって寄り添っている。

僕は、そこに行ってみることにした。

誰か言葉の通じる人を見つけたかった。

いつも通っている道だけど、目線の高さが違うだけで全く違う場所に見えた。地面が近くて空が高いせいか、とても広くて、とても生々しく感じる。歩幅が狭いから時間がかかるかと思いきや、軽い体は素早く駆けることが出来て、いつもより早く空き地に着いた。

きょろきょろと辺りを見回す。

今日は猫が誰もいない。どうしたんだろう。どこかに行っているんだろうか。

がさがさっ。

近くで、ビニールが擦れるような音がした。視界の端に、何かが動くのが見えた。僕はびっくりした。ゴミ捨て場に捨てられている、ゴミ袋が動いたと思ったからだ。けれどよく見ると、ゴミ袋の間で子猫が、袋を食いちぎって中の生ゴミを漁っているのだった。

子猫は顔をあげて、僕に気付いた。そして言った。

「なにか用？」

「えっと...いや...」

用という訳ではないのだけれど。

「あの、何してるの？」

「何って、食事だけ」

子猫は変な顔をした。何を当たり前のことを訊いてくるんだ？ という感じだった。

(やっぱり猫には言葉が通じるんだ...)

ということは、やっぱり僕は猫になってしまったんだ。間違いなく。

考え込んでいる僕に、子猫は言った。

「君、見ない顔だな」

「あ、うん」

「俺はクゥ。君は？」

「...ヒロ」

僕は、友達に呼ばれている呼び名を名乗った。クウは、器用にゴミ袋にかけてある網を掻い潜って出てきた。

「ひとりなのか？」

「...うん。それで、誰かいないかと思って」

クウは口の回りを丁寧に手で拭くと、僕の前に座った。動物の匂いがする。

「ヒ口、君もしかして捨てられたのか？」

「え？」

「毛並みも綺麗だ。でも散歩とか迷ったとかって訳じゃないんだろ？」

突然猫になってしまったなんて、うまく説明できるとは思えない。家猫から急に外猫になってしまったと言った方が、外の生活に慣れていないことの言い訳になるかもしれない。

「えっと...うん」

「そうか。辛かったな」

曖昧にした返事に、クウは頷いた。

「なら、俺がしばらく面倒見てやってもいいよ」

「あ、ありがとう...」

僕はギクシャクと答えた。ありがたい申し出ではあったけれど、猫として慣れていない僕は、ぼろを出さずに彼と一緒にいられるのだろうか。もしも元人間だとばれたら、気持ち悪がられるかな。

「ま、着いて来いよ」

クウは僕を案内して町中を回ってくれた。知っているつもり町の町だったけれど、猫のサイズで猫の視点で歩くと随分違って見えた。クウはくんと顎で角の家を指し示した。松本さんの家だった。前にお母さんのお使いで、回覧板を持ってきたことがある。

「どんなに腹が減っていても、あそこの家の前のゴミは漁っちゃ駄目だぜ。あそこのおばさん家の中から見張っていて、見つかると箒を持って追っかけてくるから。俺、一度逃げ損ねてぶんなぐられたことがあるんだ」

「...うん」

松本さんはいつもうちのお母さんに、猫やカラスがゴミを漁って迷惑だ、という話をしていた。だからそれくらいやってもおかしくない。

「ねえ、クウ」

「なに」

「でもさ、松も...そのおばさんにしてみたら、自分の家の前が汚されちゃう訳だから、僕らがゴミを散らかすのは迷惑だし、怒られても仕方ない、かもしれないよね？」

僕はおずおずと言ってみた。クウは鼻で笑った。

「それはそうかもしれないけどさ。おばさんは確かに、掃除するのは面倒だし、ゴミ捨て場が汚れているのは不愉快かもしれない。でもさ。俺たちは食べなきゃ死んじゃうんだぜ？ それに人間ってヤツは、まだまだ食べられるものをどっさり捨てちゃうんだ。もったいないじゃないか。それを食べてやってるんだから、別に構わないと思うけどな」

クウは黒い鼻をつんと尖らせて、ちょっと不満そうに言った。

「そうか…。うん。そうだね」

僕は引き下がる。

僕の家のゴミ収集所は、ちゃんとスチール製のケースが置いてあって、その蓋を開け閉めして中にゴミを入れる。だから、カラスや猫に荒らされたことは無い。松本さんの家の収集所は、網をかけてあるだけだ。場所に寄っては、枠組みをつけてみたり、重石をつけてみたりして、猫が掻い潜って中に入ったり、カラスがつついても嘴が届かないように工夫しているところもある。でも、猫もカラスも頭が良くて、そんな人間の工夫はあまり意味が無い。

今も、クウは重石につけてあるポールと、上から垂れ下がる網の間を手でひっかいて隙間を作り、さっと網の中に入ってしまった。

「どうしたヒロ。おまえも来いよ。腹減ってるんだろ」

「……」

僕は恐る恐る、クウが開けてくれた隙間から中に入った。ゴミの臭いがする。いつもより臭く感じるのは、猫になって鼻が良くなったからだろうか。

クウはビニール袋を白く小さい牙ととがった爪でやぶって、中身をぶちまけていく。レシートや割り箸、コンビニの弁当の入れ物が出てきた。

「燃えるゴミの日だってのに、分別なんかしっちゃいない。お。漬物が残ってる」

独り言を言いながら、クウは端に残ってへばりついていて、乾燥した福神漬けをはぐはぐと食べ出した。

「ヒロも食べば」

「……」

クウは半分残して、僕の方に鼻先で入れ物を押しやってくれた。

「…ありがとう」

一応そう答えたけれど、ゴミ袋と一緒に入っていたらしい、小さな綿埃みたいなものが絡まっていて嫌な気持ちになった。

クウはふんふんと匂いを嗅いで探しながら、生ゴミが縛って入れてあるビニール袋を掘り出した。割くと、どろっと中身が零れた。

「うへえ。腐ってやがる」

流石にそれにはクウも嫌そうな顔をして、手で押しやった。そして、僕を見た。

「なんだ。食べないのか？」

「……」

「まあ、今まで部屋の中で、専用の皿に高いキャットフード入れてもらって食ってたんじゃ、抵抗があるのも分かるけどな。無理にでも食っておいた方がいいぜ？ これを逃したら次はいつ食えるかわからないんだから」

「……うん」

僕は返事をしたものの、どうしても食べる気になれなかった。

「いらぬなら、俺、食っちゃうぜ？」

「うん。どうぞ」

クウは目を細めて僕を見て、ペロりと埃ごと漬物を食べてしまった。クウが僕のことを贅沢な

奴だ、と思ったのか、捨て猫だと同情されたのか、よく分からなかった。

「俺は、次の餌場に行くけど。どうする」

「行くよ」

僕は即答した。ゴミを食べる気が起こるとは思えなかったけれど、ひとりで置いていかれるのはとても嫌だった。またひとりにはるのは、とても心細い。

クウはすたすたと前を歩きながら、振り返らずに言った。

「おまえは飼い猫だったから、人間寄りの考え方なんだろうけど」

「え？……うん」

「俺たちだって、やりたくてやってるんじゃないよ。残飯漁るなんて嫌だし、散らかって人間が嫌な思いをすることも、それで嚴重にゴミだしをして、余計に飯にありつけなくなることも、分かってる奴は分かってる」

僕は、やりたくてやっているんじゃない、という言葉に驚いて、黙って聞いていた。

「だけど仕方ない。雀も少なくなった。昔みたいに、鼠駆除の為に重宝してくれることもなくなった。町ぐるみで可愛がってくれることもなくなった。臭い、うるさい、汚いって迷惑がられる」

「……………」

クウは俯いている僕を、ちらっと振り返った。

「別に突然俺らがうるさくなったわけでも、くさくなったわけでもないんだけどな」

「…そうだよ」

「重宝がってた癖に急に冷たくなって、興味がなくなったからって捨てたら後は邪魔者扱い。勝手だよ」

「ごめん」

思わず僕は言った。クウの言う通りだと思ったからだ。クウは困った顔になった。

「ヒロが謝るなよ。おまえだって人間の身勝手に捨てられたんだろ？」

僕は黙っていた。そうだ、とこれ以上嘘をつきたくもなかった。かと言って、僕が実は人間なんだとか、人間に戻りたくて困ってるんだとか、そんなことを野良猫のクウに相談するのは気が引けた。

「…クウも、捨て猫なの？」

訊いてみる。クウは首を振った。

「俺の母さんが捨て猫だったんだ。俺は生まれながらの野良だよ」

「お母さんはどこにいるの？」

「車に轢かれて死んじゃった」

「…ごめん」

「だから、ヒロが謝るなって。よくある話じゃないか」

クウが苦笑いをした。

そうか。よくある話なんだ。

その後、クウはあちこち案内してくれた。歩き回ってお腹もすいたし、足も痛くなった。でも

、僕は結局一口も食べることが出来なかった。そんな僕を、クウは心配してくれたらしい。空き地に戻って、『とっておきの場所』に案内してくれた。それは、木の根元に誰かが置いて行ったビニール傘の下だった。開いて、柄の部分を地面に埋めてある。雨避けの為に、人間がわざとそうしていったくれたらしい。その下には、クウが集めて持って来たと言うぼろぼろの布切れが敷いてあった。

「ちょっとここで休みな」

「うん。ありがとう」

汚いとか、虫がたくさんいるとか、本当は思った。けれど、疲れていてそんなことはどうでもよくなった。僕は布の上に手足を縮めて蹲る。尻尾はそっと丸めて足元に沿わせた。ふうっと溜息をついて目を閉じた。

目が覚めたら全部夢で、自分の部屋のベッドに戻れているといいなと思いながら。

「おい、ヒロ。起きろ」

クウの声で目が覚めた。やっぱり僕は猫のままだった。でも、それにがっかりするよりも先に、お腹がぐうと鳴った。クウがそれを聞いて、そら見ろ、という顔をする。僕は、恥ずかしくなった。

「今日は、どこに何をしに行くの？」

「取り敢えず今日は日が暮れるまでここを離れる」

「え？ どうして？」

正直に言えば、折角見つけた居場所を離れるのは怖かった。クウは言った。

「今日は日曜日だからな。近所の子供たちがここに遊びに来る」

ああ、そうか。そう言えば今日は日曜日だ。僕は少し離れた公園に遊びに行くことが多かったけれど、この空き地で遊んでいる子もいたはずだ。

「子供たちがくるとここにいちゃいけないの？」

「いけなくはないけど、ボールが飛んでくともあるし、騒がしくて落ち着けないぞ。それに、中には俺たちを捕まえようとするやつらもいる」

「捕まえてどうするの？」

「別に向こうは遊んでるつもりなんだろうけど、無理矢理抱きかかえて地面に投げつけたりするよ」

それを聞いて、そんな光景を見た覚えがあった。

”猫はどんな高さからでも着地できるんだぜ”

なんて言って、滑り台の上から落としたり、勢いをつけて放り投げたりしている子。

「...そんなことされて、大丈夫なの？」

「大丈夫なもんか！」

クウは呆れた、とばかりに大声で叫んだ。

「痛いに決まってるじゃないか。俺たちが着地出来るのは、自分で飛び降りれると思った高さから自分の意志で飛び降りるからだよ」

「そうだよね」

どんな高さかからどんな勢いで落ちても大丈夫なら、高いところまでうっかり登っておりられなくなってしまった猫がニュースになるわけがない。

「それに」

「まだあるの？」

自分が高いところから落とされたら、まだ慣れていないからきつときちんと着地することができなくて、酷く体を打って痛い思いをするに違いない、なんて考えていたところだったので、とても怖くなった。

「なにされるの？」

「犬が来るんだ」

「犬？」



犬なんて、散歩している人はよく見かける。

「その何が駄目なの？」

「オオカミみたいなでかい犬がいるんだ」

それはちょっと言い過ぎじゃないのかなと思いつつ、僕はそれで？ と先を促す。

「山みたいのでかい毛むくじらの黒い犬だ。俺たちはヤマって呼んでるんだけど」

そのままじゃないか。と吹き出してしまいそうになるのを我慢する。クウが気を悪くするといけないから。

「そのヤマがどうしたの？」

「こいつはひとりで歩いてるんだよ」

「飼い主の人と一緒にじゃないんだ？」

「違う。飼い主が散歩に連れて行くのが面倒で、綱をはずしてひとりで自由に歩かせてるんだ」

「ええっ？」

「だからヤマはやりたい放題さ。庭を荒らしたり、俺たちを追いかけまわしたりするんだぜ」

犬に悪気がなくても、犬が嫌いな人にとっては綱なしでひとりで歩いている犬は怖いだろう。それに犬がひとりで歩いていて、もしも事故に遭いでもしたらどうなる。犬は自分ひとりで携帯で救急車を呼ぶこともできないし、飼い主は誰だって喋って説明することもできないのに。

「無責任な飼い主だね」

「そうだけど、人間なんてそんなやつばかりさ」

そんなやつばかりじゃないよ。

そういいたかったけれど、いえなかった。そんな人間ばかりじゃないはず。でも、そんな人間もいる。だから、クウはここにこうして野良猫としているんじゃないか。

僕はしょんぼりとしながら、立ち上がった。

その日は子供たちとヤマをやり過ごす為に、日が暮れるまで空き地には戻れなかった。その間クウと、日向ぼっこをしにいった。

「ここが居心地がいいんだ」

と教えてもらったのは、中川さんの家の車のボンネットの上だった。

”猫の足跡や爪痕がついてとても迷惑だ”

と、前に中川さんが言っていたのを知っていたのだけれど、折角良かれと思って僕に教えてくれているクウに、のぼりたくないとは言えなくて、一生懸命爪を出さないようにのぼった。慣れていないから、滑りそうになるとつつい爪が出てしまって、そのたび車の塗料がちょっとだけ傷付いて禿げた。

やっと乗って丸くなってしまおうと、ぼかぼか陽気で気持ち良くてうとうとしたけれど、やっぱり中川のおばさんに見つかって、窓を思い切りあけて

「こらっ」

と怒鳴られた。僕らは転がるように、というか僕は驚いて本当に転がり落ちて、肩をしこたま打ったのを我慢してクウと一緒に走って逃げた。

雀が道の窪みに出来た水たまりで水浴びをしているのを見て、クウが狩りを教えてくれようと

したのだけれど、僕はとてもうまく気配を消して飛びかかることが出来なかったし、クウも子猫だからあまり狩りがうまなくて、一羽も獲ることが出来なかった。尤も、もし獲れたとしても生でむしゃむしゃ食べる勇氣はとて僕にはなかった。

日が暮れてからやっと空き地へ帰って来た時は、家に帰って来たみたいにほっとした。そう思うと余計に、居心地の良かった僕の部屋のことを思い出した。ふかふかのベッド、お気に入りのカーテン。ねだって買ってもらった、大好きなヒーローの絵が入った机。絨毯だって柔らかくて気持ち良かったのに。

帰りたいな、と思った。

お母さんが干してくれて、お日様の匂いがするあの布団に潜り込んでぐっすりと眠りたい。

そう思ったら哀しくなってきた、僕はクウから少し距離を取って丸くなり、自分の両手で顔を隠した。猫は人間みたいにわんわん泣くことができなくて、哀しい気持ちをどうしたら洗い流せるのか僕にはわからなかった。お腹がぺこぺこで、体はすっかり疲れているのに全然寝付けなかった。やっと眠りについたところで、クウに起こされた。僕はちょっと不機嫌になった。

「なに？」

「来いよ。ご飯だ。新品だからおまえも食えると思うよ」

「新品？」

僕は顔を起こした。すぐに、意味がわかった。どこかのおばさんが、買って来た猫用の缶詰を開けて地面にいくつも置いてくれているのだ。良い匂いだ。道理でお腹が空く訳だ。

そっちの方へ言ってみると、おばさんが僕の顔を見て言った。

「おや。見ない顔だね。捨てられたのかい？ 可哀想に」

と言いながら、僕の前にも缶詰を置いてくれた。他には牛乳と、紙皿の上にドライフード。

猫用の餌なんて気持ち悪い、と思わなかった。実際、美味しく感じた。兎に角お腹が空いていた。昨日の朝から何も食べていないのだから。

たくさんの猫が群がって食べた。ひとり一個という訳にもいなくて、食事は競争だった。なんとか満足できるだけ食べて、僕はふうっと溜息をついた。それを見て、クウが笑った。

「落ち着いたか？」

「うん。なんとか」

「あの人は時々、食べ物を持ってきてくれるんだ。いつも新品だから大丈夫」

僕は大丈夫、という言い方が気になったので、訊いてみた。

「大丈夫ってどういうこと？」

「食べても大丈夫ってことさ」

そう言われてもよく分からなかった。黙っていると、クウの方から説明してくれた。

「人間が持って来る物を食べる時は、気をつけなきゃ駄目なんだ。食べられる物とは限らない」

「どういうこと？ 古い物のときがあるってこと？」

クウは尻尾の先をくるくる動かしながら、つまらなさそうに答えた。

「それもあんだけど、毒が入ってることがあるからさ」

「どっ、毒？」

僕は思わず立ち上がる。

「なんのために」

「理由があるならまだ諦められるさ。別になんのためってこともないんだ」

愉快犯、という言葉思い出した。

「殺すのが、楽しい？」

「そう。もがき苦しんでるのを見て大喜びで写真やビデオに撮っていくやつもいる。親切そう  
な上っ面に騙されちゃ駄目だぞ」

「...うん」

本当にいるんだ、そんなやつが。

つい、声に出していたらしい。クウが苦々しげに言った。

「いるんだ。そんなやつが」

「...誰か、殺された？」

「俺の弟がね」

「そうか...。辛かったね」

クウは肩を竦める。

「まあね。でも、よくあることだから」

よくあること、なのだ。

僕の妹がもし誰かにそんな目に遭わされたら...。考えるだけで恐ろしくて身震いしてしまう。  
それに、人間の世界でそんなことが起きたら大事件なのに、どうしてクウたちはそんな目に、“  
よく”遭ってしまうのだろう。どうしてそれが許されるんだろう。人間と猫の違いってなんなんだ  
ろう？

折角お腹がいっぱいになったのに、僕は悲しい気持ちになってしまった。

「別に食べたくないのなら好きにすればいいよ。でも、後で知らないぞ」

初めの頃は、しょっちゅうクウに言われながらも、どうしても残飯を食べることが出来なかった。だけど、餌を持ってきてくれるお婆さんは、たまにしか来なかった。僕は空腹に負けて、クウと一緒に生ゴミを漁るようになった。生えている草や落ちている物も、匂いをふんふんと嗅いで美味しそうだと思えたら食べた。時々あまりのまずさに吐き出すこともあったし、お腹が痛くなることもあった。でも、飲める薬もなかったし、駆け込める病院も、連れて行ってくれるお母さんもいなかった。寝て直すしかなかったけれど、クウがこの草を食べれば吐けるとか、治るとか言って色々持ってきてくれて助かった。

松本さんに追いかけて逃げ損ねて、箒で叩かれた時は痛かった。僕はまともに箒の先に当たって、宙に浮いた。吹っ飛んで転がった。痛かったけれど、そのまま逃げた。それでも、鼠や雀はまだ食べることが出来ない。クウが時々食べていたけど、食べているのを見るのも怖かった。でも、僕が人間だったときに肉を食べたことがないかと言ったら、まったくそんなことはない。焼肉、ハンバーグ、カレーライス。大好きだった。牛肉、豚肉、鶏肉。なんの肉かはわかっていたはずなのに、こうして泣き叫んで逃げ惑うのを捕まえて、殺して、皮をはいだものだとは思わなかった。だけど、口の周りを汚しながら食べているクウを、残酷だとは思わない。だってクウは、自分で一生懸命狩りの練習をして、失敗して、お腹を減らして、頑張っ—対—で戦った末に勝ったんだから。僕みたいに、スーパーで綺麗にラップされた切り身をお母さんが買ってきて、料理してくれたのを食べているだけなのとは訳が違うと思った。僕は面倒なことは全部人に押し付けて自分がやったことがないだけなのに、それでクウが残酷だなんて、思うのはおかしいじゃないか。

お風呂に入れないことにも、その内に慣れてしまった。体中が痒かったり、汚れで毛が固まったりしたけれど、その頃にはちゃんと本物の猫のように、後ろ足で体のあちこちを搔くことが出来るようになっていた。学校に行かなくていいことも、「勉強しなさい」とお母さんに怒られることもなくて、その点ではとても気楽だった。

だけど、やっぱり戻れるものなら人間に戻りたかった。

でもどうやって？

猫になってしまった原因が分からないから、どうやったら戻れるのかもさっぱり分からない。困っている内に時間は過ぎて、猫でいることに慣れて、段々と、人間だったことが僕の見ていた夢なんじゃないだろうかと思うようになってきた。

自分の家には戻らなかった。怖かったから。お母さんが僕を探して泣いていたらどうしよう。それとも、探していなかったらどうしよう。万が一、僕が普通に家にいたとしたら？ そう思ったら、怖くて様子を見に戻ることも出来なかったんだ。

人間でいたときには、猫は気楽でいいなあだなんて思っていたけれど、実際になってみるとそうでもなかった。寧ろやることはいっぱいあったし、中々大変だった。餌を確保しなくちゃいけないし、やんちゃな子供に追いかけられることもある。

ある日、餌場を開拓しよう、とクゥに誘われて、少し遠出をすることにした。

「そっちまで行くな、駅前の商店街に飲食店がたくさんあるから、そっちの方がいいかもしれないよ」

と僕が言うと、クゥは目を丸くした。

「へえ。ヒロよくそんなこと知ってるな」

人間のときお母さんと時々買い物に行っていたから、とは言えないので、まあね、と適当に答える。

「なら商店街へ行くとしても、こっちの道から行くぞ」

「遠回りじゃないの？」

「そうだけど、あっちへ行くとクロさんの縄張りだから」

猫同士の縄張り争いだなんて、人間でいたときはあまり興味がなかったけれど、今となっては死活問題だ。子猫の僕たちはとてもクロさんたちのグループには勝てない。おとなしく畑の方を回り道していくことにする。

「！」

僕は走って物陰に隠れた。

「ヒロ！」

クゥが慌てて追ってくる。

「どうしたんだ？」

僕を気遣って小声で訊いてくれる。

「いや、あの、人間が」

「子供じゃないか。別に隠れるほどのことか？」

「いや……うん」

クラスメートのケンだから、とは言えない。よく学校から一緒に帰っていた。この辺りまで。別にケンが僕を見て僕だと分かるはずはないのだけれど、なんとなく猫である僕の姿を見られなくなかった。僕がいなくなったのに、僕以外の友達と普通に帰っている友達を見るのも嫌だった。

クゥは変な顔をしながらも、ケンが通り過ぎて僕がほっと息をつくまで黙って待ってくれていた。

「ごめん。行こうか」

「ああ。なんだ、あの人間に前に悪さでもされたのか」

「いや、そういうわけではないんだけど」

ガサガサ。後ろで大きな音がする。振り返ると、大きな黒い犬が僕らを見ていた。

「うわあっ、逃げろ!!」

「ええっ?!」

クゥが脱兎のごとく駆け出して、僕も慌てて追いかける。走りながら振り返ると、犬はちょっと僕らを追いかける素振りを見せたが、すぐに飽きたようで別の方向を向いて歩き出した。

「クゥ！ クゥ、もう大丈夫だって」

僕の声聞いてクゥも走る速度を落とした。

「ああ良かった」

「なに？」

「あれだよ。あれがヤマ」

「あれが？」

あれは確か、金子さんとこの犬だ。金子さん、こんな散歩のさせ方してたのか。

そんなある日のことだった。空き地に、顰め面をしたおじさんがやってきた。僕たちを見て、不愉快そうにしゅしゅと追い払いながら、空き地の入口に看板を立てた。

『関係者以外立ち入り禁止。猫に餌をやらないでください。地主』

看板が立ってから数日して、多分土曜日か日曜日だったんだと思うけれど、子供たちが何も知らずにやってきた。看板を読んで、困ったね、どこへ行こうと立ち去る子もいれば、いつも通り遊ぼうとする子もいた。けれど、どこかで見張っていたのかおじさんが来て、

「看板が見えないのか。立ち入り禁止だ。ここで遊ぶんじゃない」

と怒ったのでみんな逃げていった。お陰で僕らは自分の居場所でゆっくりすることが出来て、思い思いに毛づくろいをしたり爪をといだりした。

更に何日かして、久しぶりにおばさんが来て、その看板を見てぎょっとしていた。買って来た餌は置いていってくれたけれど、もうそれきり餌をやりに来てはくれなくなってしまった。

僕は、どうしていいか分からなかった。確かにここは僕らの土地でも、おばさんの土地でもない。勝手に居座っているのは良いことではないかもしれない。でも...使っていない土地にちょっとだけいさせてもらうくらい、駄目なんだろうか。だって僕らは好きで野良猫に生まれてきた訳じゃない。最初に人間が、勝手にペットにしておいて、勝手に捨てたから野良猫になってしまったんだ。家にも置いてもらえない、空き地にもいちゃ駄目なら、どこへ行ったらいいの？

居心地が良かった雨避けのビニール傘は、おじさんが看板を立てた時に、引っこ抜いて捨ててしまった。

雨が降っても雨宿りする場所も無い。僕らはびしょびしょに濡れたまま、震えながら体を寄せ合って過ごした。雨はいつまでもやまなくて、何日か降り続いた。寒くて、なんだかとてつもなく惨めな気持ちになった。しばらく思い出していなかった、あの僕の部屋を思い出した。あったかい部屋。大きなクッション。

おじさんはそれから時々やってきて、看板に張った紙の字が薄れたのを新しいのに張り替えたり、ごみを拾っていったりした。そのたびに、僕らを忌々しそうな顔で見ている。多分、猫があんまり好きじゃないのだろう。僕はなんとなくしょんぼりしたけれど、クゥはあまり気にしていなかった。

「人間が僕らを邪魔にするのなんてよくあることだよ」

と言って。

その言葉は、猫の生活に慣れてきた僕にはとても複雑だった。邪魔にされる猫の気持ちになっても、自分の都合だけで邪魔にしてきた人間と、かつて同類だったことを思い出しても、寂し

くなった。

珍しくその日は、僕の方が先に起きた。なんとなく肌寒くて、ぶるっと身震いをする。素早くあたりを見て確認する。周囲を警戒なんて、猫になってから初めてやったけど、猫はそれをやっていないと生きてはいけない。

「あれ？」

通りにトラックが止めてある。今まで見たことがない車だ。作業着みたいな服を着た男の人が何人かいる。なんの作業だろうと思ってそれを眺めていた僕は、次の瞬間全身の毛を逆立てた。

「クウ！ 起きて！」

僕は腰を浮かせてクウに叫んだ。

「ん？ なんだ？」

「クウ、大変だよ。あの人たちを見て」

「え？」

クウも僕の視線の先を追って、トラックの方を見た。でも、クウにはすぐにぴんどこなかったみたいだ。

「あれ、なんだ？」

僕の方に顔を寄せて、低く呟く。僕の態度で、何か良くないことだというのはクウにもわかっているのだ。男の人たちはトラックから、大きな籠をおろして地面に置いた。

「あれ、僕らを捕まえに来たんだよ」

それで、クウにもあの人たちが車からおろしている道具の使い道に気がついたらしい。

「捕まえてどうするんだよ」

僕にはすぐに答えられなかった。わからなかったからじゃない。

「ヒロ？」

「保健所の人か業者の人かわからない。でも、動物愛護団体の人には見えないな」

「ヒロ、どういうことだそれ」

動物愛護団体の人なら、里親を見つけてもらえるのかもしれない。でも、クウと離れ離れになってしまう。この空き地にもいられなくなる。それとも、避妊・去勢手術をされてまた放されるかもしれない。そんなの僕はおめんだ。前にお父さんとお母さんから聞いたことがある。野良猫・飼い猫関係なく猫を捕まえて、売ってしまう業者がいるって。そんなのおめんだ。保健所の人だとしたら、捕まって、何日かしたら、僕らは。

「あいつらに捕まったら、最後だ。殺される。そうじゃなくても僕ら、二度と会えなくなる」

「ほんとか、それ」

男の人が準備を終えて、何かを探すような素振りをしだした。なにか。僕たち猫だ。

「逃げて！」

叫んで走り出した。どうしよう。闇雲に走った。クウともいつの間にかはぐれてしまった。振り返る余裕もなかった。どうしよう。どうしよう。

「助けてお母さん！」

「どうしたの、大きな声を出して」

目の前にお母さんの顔があった。僕は自分の手の平を見て、顔を触った。肉球も無い。髭もはえてない。

戻った。

「お母さん、大変なんだ、クウが」

「くう？ どうしたの。怖い夢でも見たの？」

「夢...？」

あんなに怖かったのに、ただの夢だったんだらうか。でも僕にはどうしてもそう思えない。僕は慌てて服を着替えた。お母さんが驚いていたけれど、ちゃんと説明する暇はなかった。

「すぐ帰るから。後で話すから」

そう言って僕はあの空き地へ走った。人間の体は重くて、二本しか足がないから、中々早く走れなかった。やっと着いた空き地には、人間の僕には見覚えのないあの看板が立っていた。そして猫は誰もいなかった。僕は焦ってあたりを探した。

「待って！」

トラックだ。どこかへ走っていかようとしている。

「待って！ 待ってってば！」

僕は走って車を追いかけた。運良く、運転手さんが僕に気がついて止まってくれた。

「何か用なの？」

僕は咄嗟に嘘をついた。

「僕の猫、返してください」

「君の猫がいるの？」

「お願い、返して」

大人の人たちは、突然子供の僕が来て、不審そうだった。僕があんまり、ここに僕の猫がいると断言したのもおかしかったのだらう。でも、トラックの後ろをあけてみせてくれた。そこには鉄のかごがいっぱい並んでいて、猫がいっぱいつめこまれていた。

僕は、あんまりの数に驚いた。

「どの猫。本当にいるの？」

男の人が急かす。本当はみんな連れて帰ってあげたい。みんな助けてあげたい。でも、どうしたらいいかわからない。泣きそうになる気持ちを抑えて、僕は一生懸命探した。一匹だけ、見覚えのある赤虎の猫がいた。

「クウ！」

僕は思わず叫んだ。クウは僕のことを覚えているのか覚えていないのか、よくわからない。僕の方でも、もう猫の言葉が話せなくなってしまっていた。でも、この顔は間違いなくクウなのだ。僕の命の恩人。

「この猫です。この猫。早く出して」

それから僕は、びっくりして暴れるクウを抱きかかえて家に戻った。クウははじめは暴れていたけれど、途中でなにかに気付いたようにおとなしくなった。まるで、僕がヒ口であることに気がついたみたいに。



お母さんは勿論、突然野良猫を抱えてきた僕に驚いたし、叱りもした。だけど僕は、一生懸命お父さんとお母さんに頼んだ。僕はこの猫を飼いたい。きちんと面倒を見るからって。結局はお父さんが、

「ひろゆきが自分からやりたいって言ってきたんだし、いいんじゃないか」

と言ってくれて、クウはうちの子になった。

あんなに僕に兄貴面して色々面倒を見てくれたクウは、今は僕の腕の中でぐっすり眠っている。お風呂に入れて、首輪もして、飼い猫暮らしに慣れたクウは随分顔つきも家猫っぽく変わっていた。だって昔だったら、人の手の中で落ち着いて眠るなんて考えられないことだったはずだ。

どうしたら野良猫がいなくなるんだろう。あの檻の中の子たちを全部連れて帰ることは出来ない。人の土地で餌を配ることも出来ないし、生ゴミを散らかしているのを放っておく事も出来ない。

でも。家から追い出して、空き地から追い出して、僕ら人間は彼らをどうしたいんだろう？ 結局は、死ねと言っているだけだ。直接的な言動を取らないで、保健所や人任せにして、自分さえ良ければいいのだ。

面倒くさいから、やりたい時だけ餌をやりたい、自分の土地にだけはいついてもらったら困る。

じゃあ、僕に出来ることは？

いくら考えても、思い浮かばなかった。僕に出来るのは、クウひとりをあそこから連れ出すことだけ。

だけどそれでも、僕はクウと一生一緒にいようと思った。

だって仲間だから。

いや。先輩だから。

クウが言っていた通りだ。僕ら人間が大きな顔をして住み出す前から、クウたちはここに住んでいたのだから。

「ねえ、待って。待って」

ハルは後ろで声があったので立ち止まりました。振り返ってみると、誰もいません。気のせいだったのでしょうか。でも、確かに呼び止められた気がしたのです。ランドセルの肩紐をぎゅっと握りしめました。辺りをきょろきょろと見回します。

「君、僕の声が聞こえるの？」

また声がありました。今度はちょっとびっくりしたような声です。やっぱり後ろで、自分を見て話しかけているようです。ハルはもう一度振り返り、ゆっくりと探しました。すると、道の脇に猫がいることに気がつきました。白地に黒の模様の入った子猫が、ちょこんと座って小首を傾げています。

「もしかして、今の、君？」

ハルは胸をドキドキさせながら、子猫に向かって言ってみました。猫は小さなお尻をきゅっとあげて立ち上がり、ハルの方に歩いてきて、また座りました。口が開き、細い真っ白な歯が見えます。

「そうみたいだ」

その小さな口から紛れも無く返事が聞こえたので、ハルは驚いて思わず一歩後ずさりします。

「ほ、本当に君が喋ってるんだ。どうして人間の言葉が喋れるの？」

「君こそ、どうして僕の言葉がわかるのさ」

猫の方も、ハルが振り返ったことに驚いているようです。

「どうしてって...」

ハルは言葉につまりました。

「わからないよ。僕はただ、聞こえたから立ち止まっただけで...」

「僕だってそうさ」

猫はつんと鼻をあげて言いました。

「いつも通り喋っていただけだよ。でもニンゲンはいつも僕らの言葉に気付かない。ニンゲンは僕たちがニンゲンの言葉をわかってないと思っているし、僕たちが言葉を話すとも思っていないから。聞こうとしないから聞こえないのさ」

そしてまた首を少し傾げました。

「でも君には聞こえたんだね」

「うん...」

猫が言葉を話すなんて考えたこともなかったハルは、どうして自分に猫の声が聞こえたのかわかりません。この猫は「いつだって聞こうとしない」と言うほど、今までずっと人間に無視されていたのでしょうか。今まですっかり動物たちの声を無視してしまったことが何度あったらうかと、ハルは思いました。そこでハルは、きちんと話さなくては、と考えて、少しでも目線を合わせようと猫の前にしゃがみこみました。

「...僕はハル」

「僕はシュガーだ」

シュガーはぱたりと尻尾の先を振りました。

「それで、どうして僕を呼び止めたの？」

「ああそうだ。まさか立ち止まるとは思わなくて、びっくりして忘れてたよ」

右手で髭を擦って気持ちを落ち着けてから、シュガーが言いました。

「ハルには悪いけど、別に誰でも良かったんだ。僕の声がわかって、頼みごとをきいてくれる人なら」

「頼みごとって？」

「僕の母が誘拐されたんだ」

「ゆ、誘拐?!」

ハルは思わず大声をあげました。そんなの大事件です。

「いつ? どうして? のんびりしてないで警察に電話しなくちゃ」

「...ニンゲンのか？」

少し冷たいシュガーの眼差しに、ハルは口を噤みました。警察にシュガーの代理でハルが通報することはできます。でも、まともに取り合ってくれるわけがありません。猫が泥棒に盗まれた、と言えば少しは話も聞いてくれるでしょうが、母猫もシュガーもハルの猫ではありません。

「警察には相談したよ、勿論」

「それは、猫の警察？」

警察なんてあるの? と訊きそうになったハルでしたが、その質問を予測したのでしょうか。シュガーが目を細めてハルを見上げました。

「だから。ニンゲンってどうして自分と違うものを、自分より劣っているんだと勘違いするの？」

「ごめん。そんなつもりじゃなかったんだよ」

頭を掻いて素直に謝ると、シュガーはふんと鼻を鳴らしました。

「猫だって助け合うし仕事の分担もするの。ハルが思っているようなのは違うかもしれないけど、ニンゲンで言う警察みたいなことをする猫はいるよ」

「うん。わかった」

ハルは真剣に頷きました。猫の前に屈んで話しかけているハルを、大人たちが何人か不思議そうに見ながら通っていきます。けれどハルはどう思われようと構わないと思っていました。知らない大人に疑われようと、今はシュガーに信じてもらうことが一番大事だと思いました。

「それで、警察のひとはなんて？」

と尋ねると、彼はこう言いました。

「母は僕の目の前で連れ去られたからね。僕が目撃証言を元に捜査してくれたよ」

シュガーの話によれば、シュガーは散歩に出掛けていたそうです。塀にしている空き地に戻ってくると、丁度母猫が人間に抱きかかえられて、連れて行かれるところだったのだそうです。シュガーは必死で追いかけてましたが、相手は自転車だったので振り切られてしまいました。警察の捜索の結果、犯人の家がわかったのだと言います。

「犯人が誰だかわかっているんだ？」

「ハルと同じ、ここをよく通る女の人だよ」

この道は駅まで続く大通りで、仕事や学校へ行く人がたくさん通ります。さっきから、犬の散歩やジョギングをしている人も通っています。その中のひとりなのでしょう。

「どうして誘拐なんて」

「わからないよ」

「それはいつのことなの？」

「昨日の夕方」

ハルは訊きました。

「その人の家には行ったの？」

「もちろんだよ」

悲しそうに俯いて、シュガーは話を続けます。

「警察の人たちと行ったけど、母はいなかった。女の人に母はどこだ、返せと言ったけれど、伝わらなかった」

「女の人はどうした？」

「紙皿にミルクを入れて僕らの前に置いて、家の中に入っちゃった」

「そうなんだ...」

数匹の猫がにゃあにゃあ鳴いていたら、うるさいと思うかお腹をすかせて餌をねだっていると思うかもしれません。

でも、牛乳をくれたなら誘拐するような悪い人ではないんじゃないのかな？

ハルは思いましたが、シュガーの機嫌を損ねたくなかったので言いませんでした。シュガーはハルの顔をじっと見えています。

「母は怪我もしていたし、心配なんだ」

ハルの体で陰になっているので、シュガーの目は真っ黒で大きくまん丸になっていました。

「それで、君たちの言葉がわかる人間を探していたの？」

シュガーはコクンと頷きました。ハルは、シュガーに向かって右手を差し出しました。

「じゃあそこに案内して。僕がその人に会って話してみるから」

「本当かい？」

シュガーは嬉しそうにハルの手を伝い、肩に飛び乗りました。

「ありがとう、ハル。あっちだよ」

ハルは立ち上がって、シュガーが鼻で指し示す方へ向かいました。シュガーはランドセルの上にお尻を乗せて肩に爪をたてていましたが、途中で、ハルの腕に降りてきました。ハルは抱きかかえると、走り出しました。シュガーが指し示す道は、ハルの家とは少し違う方向でした。

シュガーは気持ちが悪く、ハルの腕からぴよんと飛び降りました。見事に着地を決めると、ハルの前を走り出します。ちょっと走っては止まって振り向き、時々ハルを急かしました。

。

「早く早く！」

「ま、待ってよ！」

ハルはあまり走ることが得意ではありません。シュガーは早くお母さんに会いたくて一生懸命

ですし、元々走るのも得意です。弾かれたボールのように、あっという間にずっと先へ転がるようになってしまいます。ふたりの差はどんどん開き、ハルはすっかり息があがってしまいました。

「シュガー、ごめん。ちょっと待って」

立ち止まって膝に手を付き、呼吸を整えます。シュガーはずっと先でこちらを見て座って待っていましたが、ハルが中々来ないので戻ってきました。

「どうしたのさ、ハル」

「.....」

一生懸命に走ったので、呼吸が早くてすぐには答えられません。

「速すぎた？」

「...大丈夫」

「ごめん。でももうすぐなんだ」

「わかった。行こう」

ハルは気持ちを奮い立たせて走りました。シュガーの辛さを考えたら、自分が疲れることくらいなんでもないと思いました。

十分ほどして、ハルの家よりも少し駅から遠い、小さなアパートの前に辿り着きました。

「ここなの？」

一人暮らしの人が住む三階建てのアパートです。門があって、その先に階段がついています。

「うん。そこの二〇一号室の人だよ」

「よし」

階段を上り、二〇一号室の扉の前に立つと、ハルは意を決して呼び鈴を押しました。少し間を置いて何度か押しましたが、誰も出てきません。

「誰もいないみたいだ。...その人、大人だったんだよね？」

「うん」

「じゃあまだ仕事から帰ってないのかな」

ハルはドアの前に座り込みました。女の人が帰ってくるまで、シュガーと一緒に待つつもりでした。シュガーがハルの膝の上に座って話しかけます。

「ハル、家へ帰らなくていいの？」

「まだ大丈夫だよ。それに気になって君を置いて帰れないよ」

「ありがとう」

シュガーがまた言いました。ハルには、彼が微笑んでいるように見えました。

「いいって」

ぽんぽんと背中を叩くと、シュガーはにゃあと鳴きました。そのまま背中を撫で回し、更に頭を撫でてみます。シュガーはおとなしく撫でられていました。人差し指で顎を撫でてやると、気持ち良さそうに目をとじてごろごろいいだしました。そして前足も伸ばしてころんとハルの上に寝転がります。

そうして三十分ほどもたったでしょうか。寝ていたシュガーが急にむくっと起きて、耳と鼻をぴくぴくさせました。

「ママ！」

叫ぶなり勢いよく走り出し、階段を飛び降ります。ハルは慌てて追いかけてきました。アパートの駐輪場に、女の人が自転車を止めています。クッションを敷いた前籠から黒い猫を抱き上げました。

「ママ」

シュガーは一目散に駆け寄って、にゃあにゃあと喧しく鳴き出しました。女の人の手の中で黒猫も暴れていて、女の方はそっと黒猫を地面に下ろしました。シュガーは黒猫に駆け寄り、何度も体をこすり付けて甘えています。

よかった、無事に会えた、とハルは安心しました。思った通り、女の方は悪い人ではなさそうです。ハルは、黒猫の尻尾に包帯が巻きついていることに気が付いていました。

そんなハルに、女の方が言いました。

「君、この猫たちの飼い主？」

「いいえ、違います。ただ僕はシュガーに頼まれて...」

そこまで言って、ハルは口を噤みました。大人にそんなことを言っても、信じてもらえないと思ったからです。

「僕らは野良猫だよ」

シュガーが口をはさみます。

「この子達は野良猫です。ただ僕は、猫がお母さんとはぐれたらしいので探しに来て」

「君、シュガーって言うんだ」

女の方は、ハルがしようとした言い訳はあまり聞いていない様子で、しゃがみこんでシュガーに言いました。

「...そっか、君この前ここまで来てた子だね。私はミオ。ごめんね。君がいるって知らなくて、お母さんを勝手に連れて行って」

「なんでママを連れて行ったの？」

シュガーが訊きました。シュガーもなんとなく分かっているのか、少し甘えるようにミオに訊きました。ハルはシュガーの言葉を伝えようとしたのですが、それより早くミオが言いました。

「お母さんが尻尾を怪我していたから、病院へ連れて行ったの。検査で一日預かるって言われて、入院していたのよ。今退院して、引き取ってきたの」

シュガーが振り返ると、母猫がその通りだ、というように頷きました。

「ありがとう、ミオ」

シュガーが尻尾の先をくりくりと動かしながら、にゃあんと鳴きました。そしてハルを振り返り、

「ありがとう、ハル」

と言います。ハルはこくりと頷きました。

ミオは母猫の頭を撫でました。シュガーが母猫にすりよったので、ミオはシュガーも交互に撫でてやります。シュガーは嬉しそうに目を細め、耳を寝かせてされるがままに撫でられています。

「いい子ね、シュガー」

熱心に撫でているミオに近寄り、ハルもしゃがみこみました。母猫は一声鳴いて、ハルの足に体を擦り付けてきました。母猫の言葉はハルにはわかりませんでした。それでも、シュガーと一緒に自分を探してくれたことについて、お礼を言ってくれているような気がしました。お礼を言ってもらうほどのことじゃないよ、と思いながら、ハルも母猫を撫でました。にゃおん、とまた鳴いた母猫を見て、ミオがくすりと笑います。

「ミオさん、猫の言葉がわかるの？」

ハルが遠慮がちに訊いてみると、ミオは首を横に振りました。

「わからないよ。でも君はわかるみたいだね？」

ミオがまるで当たり前のことのように訊いてくるので、ハルは正直に答えました。

「シュガーの言葉だけ聞こえたんだ。でも、お母さん猫の声はわからない。今まで動物の言葉がわかったこともないよ」

「そう」

ミオはやはりなんでもないことのように頷きます。

「人間同士も同じだよね」

「え？」

ミオは真面目な顔でハルを覗き込みました。

「人間も、相手の話を聞くつもりがなければ同じ日本人同士でもわかりあえないでしょ。反対に、言葉が違ってても分かり合おうってお互い努力すれば、なんとなく意味がわかったりするの」

「...はい」

「君とこの子は、思いが通じたんだね」

そう言われると、ただそれだけの、不思議というよりただ素敵なことのように感じました。

ミオは立ち上がって、シュガーたちに言いました。

「野良猫なら、うちの子にならない？ 君たち以外に家族はいるの？」

「いないよ。ママとふたりだけ」

シュガーが素早く答えました。

「いないって」

ハルが言うと、ミオはにこりと笑いました。

「じゃあ一緒に暮らそうよ」

猫たちはにゃあと嬉しそうに賛成の声をあげました。

「良かったら君も時々遊びにきてあげて。ハルくん」

「はい」

頷いて、ハルは首を傾げました。

「あれ、僕の名前...」

ミオはにこりと笑いました。

「なんとなく、シュガーがそう呼んでいた気がして」

にゃあ、とシュガーが鳴きました。

## こねこのお願い

<http://p.booklog.jp/book/27451>

著者：さくら ゆき

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sakuyuki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27451>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27451>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.